宮大工（みや建築）　伊藤　實さん

きっかけは丁山と出稼ぎ

伊藤さんは、市内の建設会社に入り、大工仕事をしているうちに、後町組と上町組の丁山の山車を作る機会に恵まれました。また、出稼ぎで京都や姫路に行ったとき、伝統建築を直に見て回り、宮大工の世界に興味を持ちました。

興味を持ってからは、今は亡き師匠に追いつきたいという一心で仕事に取り組んできました。

「技術向上の面では師匠を越えたいと思っていますが、師弟の関係は一生変わることはありません。今は職人の世界から義理人情が消えつつあります。でも人間関係が一番大切だと思っています」。

今は伝統建築物の建て替え時期

「昔は宮大工としての仕事の量が少なく、一生に一つか二つできればと思っていましたが、今は伝統建築の建て替え時期です。設計から木ひろい、原寸、墨付け、彫刻も含めてやれる職人は、市内にはほとんどいません。結局、ここに職人がいなければ、よその職人が建てることになります。地元の建物を地元の人が造れないのは残念なことです」。

みや建築でかかわった五重の塔

最近の仕事は淨明寺と学校

伊藤さんの仕事は、最近では森岳寺や玉鳳院、淨明寺、西福寺などのほか、常盤小中学校も手掛けました。山梨や山形、仙台などにも行っています。

「常盤小中学校の融合空間棟は、自然木が多く、柱を組む部材の長さや直径、形状が全部違い、それを釘を使わずに正確に組み立てるのは、本当に大変でした。建築までの全てが苦労の連続でしたが、あとで悔いの残らない仕事をしたくて頑張りました。予算の制約や設計者の考えなどもあり、お互いに100パーセント満足することはなかなか難しいですが、完成した姿を多くの人に見てもらえ、やりがいのある仕事でした」。

危険！部材を抜いた工事

宮大工が少なくなり、伝統建築物についての知識を持っているがいなくなってきました。伊藤さんは、設計士や棟梁でさえ、必要な部材が分からず、部材不足のままで確認確認申請が通った現場も見てきました。

「一般住宅を作っている人には、伝統的建築物の知識は不要かもしれませんが、価値のある建築物が風雪や地震に耐えて百年・二百年先まで残っているか不安です」。

『大工にとって、自分が作った建物が倒れるということは、命を失うようなことと同じだ』と言っていた師匠の言葉を伊藤さんは、いまでも大切にしています。

これは道具のほんの一部
そろえるだけでも時間がかかります

伝統工法は技術の塊

伝統工法にはさまざまな問題に対応した技術が集約されています。バランス、強度、姿、形などどれもその経験はほかの建築にも活用できます。一生かかっても足りないくらいの学ぶべきものがあります。

「新しい工法を否定はしませんが、目先だけの新しさに心を奪われた思いつき工法も多いと思います。新しい工法は、問題点をクリアしているのか、将来、予測外の問題が出たとき、どう対応し、誰が責任をとるのか。職人と呼ばれる人は、基本をきちんと勉強することを大事にしてほしいです」。